

知事選の記録

- ◆第1回 (1947年4月5日 投票率74.25%)
 - 当 大西 正男 (民主) 98,129
 - 川村和嘉治 (中立) 89,161
 - 尾崎 治一 (社会) 60,220
 - 片岡 信滋 (自由) 43,156
 - 入交 好保 (土佐民主) 32,899
 - 決選投票(47年4月15日 66.30%)
 - 当 川村和嘉治 (中立) 171,876
 - 大西 正男 (民主) 128,255
- ◆第2回(48年1月10日 68.61%)
 - 当 桃井 直美 (保守派) 221,475
 - 柳生 義郎 (進歩派) 93,100
- ◆第3回(51年12月12日 74.94%)
 - 当 川村和嘉治 (無所属) 194,476
 - 桃井 直美 (自由) 173,265
- ◆第4回(55年12月7日 68.70%)
 - 当 溝淵 増巳 (無所属) 202,678
 - 川村和嘉治 (無所属) 152,781
- ◆第5回(59年12月1日 59.66%)
 - 当 溝淵 増巳 (無所属) 264,010
 - 小路貞次郎 (共産党) 43,014
 - 肥後 享 (無所属) 7,716
- ◆第6回(63年11月15日 70.28%)
 - 当 溝淵 増巳 (無所属) 250,146
 - 高橋 武行 (社会党) 118,651
- ◆第7回(67年12月1日 62.26%)
 - 当 溝淵 増巳 (無所属) 265,282
 - 小路貞次郎 (共産党) 59,867
 - 高田 がん (諸 派) 5,890
- ◆第8回(71年11月28日 77.64%)
 - 当 溝淵 増巳 (自民党) 230,500
 - 氏原 一郎 (無所属) 209,388
 - 谷脇 旭 (諸 派) 1,505
- ◆第9回(75年11月23日 62.84%)
 - 当 中内 力 (自民党) 221,913
 - 中島 陸馬 (無所属) 107,523
 - 上田 栄蔵 (共産党) 38,731
- ◆第10回(79年11月25日 59.20%)
 - 当 中内 力 (自民党) 252,982
 - 杉本 恒星 (無所属) 104,507
- ◆第11回(83年11月27日 57.19%)
 - 当 中内 力 (自民党) 236,379
 - 門田 豊 (無所属) 115,064
- ◆第12回(87年11月29日 67.72%)
 - 当 中内 力 (自民党) 213,854
 - 和食 延雄 (無所属) 161,164
 - 門田 豊 (無所属) 46,135
- ◆第13回(91年12月1日 75.59%)
 - 当 橋本大二郎 (無所属) 316,968
 - 川崎 昭典 (自民党) 119,268
 - 森 清一郎 (無所属) 38,202
- ◆第14回(95年11月26日 52.85%)
 - 当 橋本大二郎 (無所属) 285,614
 - 佐竹 峰雄 (共産党) 49,498
- ◆第15回(99年11月28日 62.73%)
 - 当 橋本大二郎 (無所属) 274,670
 - 所谷 孝夫 (無所属) 132,541
- ◆第16回 (2003年11月30日 65.42%)
 - 当 橋本大二郎 (無所属) 233,801
 - 松尾 徹人 (無所属) 192,932
- ◆第17回(04年11月28日 64.56%)
 - 当 橋本大二郎 (無所属) 226,428
 - 松尾 徹人 (無所属) 192,745
 - 山中 雅和 (無所属) 1,765
- ◆第18回(07年11月25日 45.92%)
 - 当 尾崎 正直 (無所属) 178,109
 - 近森 正久 (無所属) 61,919
 - 国松 勝 (無所属) 36,346
 - 関谷 徳 (無所属) 14,584
- ◆第19回(11年11月10日、無投票)
- ◆第20回(15年10月29日、無投票)

後半戦に入った知事選(24日投票)は、いずれも無所属新人で、共産党県委員の松本顕治氏(35)＝立憲民主県連、国民民主県連、共産、社民推薦＝と元総務省総括審議官の浜田省司氏(56)＝自民、公明推薦＝が激しい舌戦を展開している。これまでの知事選を振り返ると、一騎打ちは今回が11回目(第1回の決選投票を含む)。2003、04年には連年の「宿命の対決」もあった。幾多の政治ドラマを生んできた県政のリーダー選び。昭和と平成に行われた過去20回の軌跡を振り返る。(敬称略)

【1～3回】川村返り咲き

公選制初の知事選(1947年)には大西正男(民主)、川村和嘉治(中立)、尾崎治一(社会)、片岡信滋(自由)、入交好保(土佐民主)の5人が出馬。決選投票にもつれ込んだ結果、川村が大西を4万3千余票差で振り切った。

第2回は、農業報国連盟機関誌の編集者だった川村の公職追放に伴い実施。保守側は元岐阜県知事(官選)の桃井直美＝南国市出身＝を、進歩派の社会党、国民協同党は会社社員の柳生義郎を

擁立。大差で桃井が2代目知事に就いた。

第3回は現職の桃井(自由)と公職追放が解けた川村(無所属)が一騎打ち。桃井優位の下馬評を民主、社会両党など連合部隊の川村が覆し、「地下足袋が白足袋に勝った」と当選の弁を語った。

【4回】溝淵 現職下す

55年の第4回は、動乱期から安定期へと流れを変えたという意味で、戦後県政史上の転換点となった。

現職、川村に挑んだのは、川村から請われ国警本部次長から副知事に就任した溝淵増巳だった。

当時は個性の強い知事と野党の確執が続き、県政は混乱。女房役の溝淵の気持ちも次第に川村から離れた。

副知事を辞した溝淵は自民、社会両党推薦という保革相乗りの陣形。川村は「村の家」組織や県教組など保革の無所属勢を結集した。選挙戦は終始「正義の挑戦」をアピールする溝淵有利で進展。約5万票差で溝淵が圧勝した。

【5～7回】圧勝続く

初陣を飾った溝淵は、与党が県議会の定数43人中28人を占め安定。59年の県議会9月定例会では勤評闘争で警官隊が入るなど混乱したが、教育2条例を強行採決し乗り切る。その余波が残る同年末の第5回選挙。溝淵は共産党の小路貞次郎の挑戦を大差で退けた。

第6回。3選を狙う溝淵に挑んだのは社会党の元県教育長、高橋武行。社会党公認を共産党も推薦したが、円熟味を増した溝淵には歯が立たなかった。再び溝淵—小路の対決となった第7回も溝淵が圧勝。4選を果たした。

【8回】「世紀の決戦」溝淵制す

溝淵の5選阻止に打って出たのは氏原一郎。官僚出身の溝淵と、4期16年高知市長を務めた氏原は力量も甲乙つけ難く、ともに旧伊野町出身、年齢(71歳)も同じと因縁めいた対決だった。

無所属を通してきた溝淵は、初めて自民党公認で出馬。氏原は社共共闘の構図で、「世紀の決戦」と評された。戦いは熾烈(しれつ)を極め、投票率77・64%は知事選史上最高を記録。結果は2万1千票余りの差で溝淵が氏原を振り切り5選を果たした。

この名勝負の裏では保守内部に新たな火種も芽生えていた。69年当時の副知事、中内力の不再任問題に端を発した「溝淵—中内」の対立だ。

中内は溝淵本人から不出馬を聞き第8回知事選への準備を進めていたが、溝淵出馬が決定。塩見俊二(党県連会長＝参院議員)らの調整で保守県政継続のため出馬を断念した。

その時の「念書」をめぐり、4年後に保守の抗争が火を噴く。

【9回】念書めぐり公認争い

選挙結果は自民党公認の中内が社公民3党の推す無所属、中島陸馬(社会党県本部委員長)らを一騎打ちで破り、初当選した。

だが前段では、6選を期す溝淵と、雌伏6年満を持す中内の両支持勢力が対立。自民党本部をも巻き込んだ激しい公認争いを展開し、県政史上最大のドラマとして語り草になった。

発端は前回選挙時の「念書問題」。「今回は溝淵を公認する代わりに次期県知事選では中内を公認するよう責任を持つ」とする内容。塩見と衆院議員(党県連副会長)の仮谷忠男が署名、中内後

援会の岡林秀起との間で交わされていた。

約束履行を迫る中内派に、「あずかり知らぬ」と選挙態勢を固める溝渕派の対立は激化。党県連が公認決定を党本部に一任、当時の幹事長、中曽根康弘の下、収束を図る異例の事態となった。

中内公認が決まると、仮谷ら溝渕派は県連役員を辞任。溝渕自身も離党届をたたきつけ、無所属で出馬表明した。保守分裂が決定的となったが、告示52時間前に溝渕がドクターストップで戦線を離脱。5期20年にわたる知事の座を明け渡した。

【10、11回】中内 連続で圧勝

79年の第10回は再選を期す自民党公認の中内が、社共両党の推す元南国市長、杉本恒星に圧勝した。83年の第11回も中内は自民党公認で万全の構え。野党側は社会党が橋渡し役となり、「全野党共闘」を働き掛けたが失敗。革新統一候補として元県高教組委員長の門田豊が出馬した。社共両党、県総評を中心とする「県民連合」で挑んだが、中内が12万余票の差で3選を果たした。

【12回】保守分裂で大混乱

第12回は事実上、32年前と同じ「現職対副知事」の構図に。中内は87年の県議会2月定例会で出馬表明。自民党県連は党本部へ「公認」を上申し、4選確実とみられた。

だが、自民党安芸市支部の推薦を受けた前副知事の和食延雄が出馬表明。構図は複雑化した。「公認」を求める中内と「推薦」を求める和食の争いは「中内公認」で決着したが、和食派の自民県議、市議ら三十余人が集団離党して自民クラブを結成。保守分裂の大混乱となった。

また「和食推薦」を決めた社会、公明両党に対し、共産党は革新統一候補擁立を主張。決裂した共産党は土壇場で前回出馬した門田豊を担ぎ出した。

中内は「保守票のコンクリート大作戦」を展開。自民党本部の幹事長、安倍晋太郎ら国会議員約50人の応援などで底力を見せ、和食に約5万2千票差をつけ4選を果たした。



「大二郎旋風」で県知事選史上最多の31万票

余りを獲得、初当選した橋本大二郎（1991年12月1日、高知市南はりまや町1丁目）

【13回】橋本 最高31.7万票

4期16年続いた中内県政の後を誰に託すのか。21世紀に向けたリーダーの選択は、「脱官僚政治で県政の流れを変えよう」と訴えた保守系無所属の元NHK記者、橋本大二郎が圧倒的な支持を集めた。

得票は知事選史上最高の約31万7千票。自民党公認の前副知事、川崎昭典と革新系無所属＝共産党推薦＝の高知医療生協常務理事、森清一郎に大差をつける記録的勝利で初当選を果たした。

橋本は91年8月、県内の市民グループの要請で出馬表明。の

ちに首相となる橋本龍太郎の弟で、高い知名度を誇った元ニュースキャスターは、県民意識の底流にある県政変革の期待、世代交代ムードを効果的に吸収。県内各地に「大二郎ブーム」を巻き起こした。

いわゆる“落下傘”批判もあったが、女性中心の“草の根”が支えた。最後まで圧倒的な勢いを維持し、投票率も75・59%と戦後2番目の高さを記録。44歳は当時としては全国で一番若く、初の戦後生まれの知事誕生は全国の注目を集めた。

この知事選には、県で総務部長などを務めた自治官僚の松尾徹人も一時、出馬の意欲を見せたが、「望んだ超党派の態勢が期待できない」と断念。後の橋本との戦いは「宿命の対決」と評されることになる。

【14、15回】橋本 強さ発揮

再戦を目指す橋本に対する県民の期待感は依然高く、共産党公認の佐竹峰雄を23万票の大差で破った。現職対共産党公認候補という構図に関心は薄れ、投票率は52・85%にとどまったものの、橋本の得票率85・23%は過去最高を記録した。

第15回は、既定路線とみられていた橋本の3選阻止へ、県農協連会長、所谷孝夫が10月になって急きょ出馬表明。県の減反撤退や輸入ショウガ問題など、橋本農政に反発した県内農協グループトップの出馬に、所谷陣営は「県民一揆」と位置付け。保守系現職に農協組織のトップが反旗を翻す全国でも異例の事態となった。

橋本は前回に続き政党の推薦・支持は受けなかったが、自民党の中で橋本に近い県議が積極的に動き、公明、共産両党も実質的に支援。一方、農協グループを母体にする所谷は自民党県連と自由党が推薦。自民党は分裂状態に陥り、橋本が圧勝した。

【16、17回】連年の「宿命の対決」

橋本が4期目に挑んだ第16回は12年越しの宿命の対決となった。

橋本の初当選から3年後に高知市長選を制し、県都のリーダーとなっていた松尾が3期目の任期途中で市長を辞して出馬。12年前にいったんは回避された「橋本—松尾」の因縁対決となり、32年ぶりのお堀を挟んだ“トップ対決”に県民の関心は高まった。

県政史に残る戦いの導火線に火を付けたのは、知事選直前の県議会9月定例会で噴き出した「疑惑」だった。橋本が初当選した第13回知事選で「橋本陣営が選挙資金をダム建設談合の裏金で調達した」との疑惑を浮上させた自民党は、10月に入って急きょ出馬表明した松尾を県連レベルで推薦。社民党、公明党県本部、連合高知も推薦や支持に回った。

橋本陣営は根強い草の根パワーで迎え撃ち、自民党を除名された県議や改革路線を評価していた共産党が支援。「改革の継続」を訴えた橋本には多選批判もあったが、約4万票差で松尾を退けた。

因縁はなお続く。選挙資金疑惑を追及していた県議会百条委員会は翌年の9月定例会で談合を“クロ認定”。橋本に辞職勧告決議を突き付けた。決議に強制力はないが、橋本は「選挙で県民の信を問う」として辞職。県政史上初の出直し知事選に突入した。

構図は再び橋本、松尾の事実上の一騎打ちに。自民党は松尾を党本部推薦に格上げし、党幹事長や閣僚が次々と来高したが、橋

本は草の根の底力ではね返し、約3万3千票差で5選を決めた。松尾は政界引退を表明した。



当時全国最年少の40歳で知事選に

初当選した尾崎正直。2、3期目は連続無投票当選を果たした(2007年11月25日、高知市本町1丁目)

【18～20回】尾崎 4党相乗りで安定

改革派知事の先駆者として4期16年務め、去就が目された橋本が07年8月、国政への挑戦を視野に不出馬を表明。橋本の出方をにらんでいた県内政党などの「ポスト橋本」の人選は混迷を極めたが、高知市出身の財務官僚、尾崎正直が10月後半に出馬表明。4候補による短期決戦を制し、40歳で全国最年少の知事(当時)となった。

不出馬を表明した橋本は、後任の「意中の人」として県政策企画部長の十河清を説得したが、十河は固辞。これと前後して高知中央高校理事長の近森正久、県労連前委員長の国松勝＝共産党推薦、毎日新聞社社員の関谷徳が出馬を表明した。

県内政党や経営者グループなどの説得を受けた尾崎の出馬表明は4候補の最後になったが、自民、民主県連、公明、社民の各党に加え、連合高知や橋本に近い県議会会派、県政会も尾崎推薦で相乗り。組織力で尾崎が圧倒的優勢に立った。

「対話と実行」を掲げた尾崎は17万8千票余り(得票率61・21%)を獲得。ただ「尾崎優勢」の構図に県民の関心は高まらず、投票率は過去最低の45・92%と低迷した。

信任度の面から厳しい船出を強いられた尾崎だが、就任後は看板政策の産業振興計画などを通じて国や市町村、民間と幅広く連携。4党相乗りの政治基盤も相まって安定的に県政を運営した。

2期目の知事選は、県政野党を自任する共産党も「尾崎県政のプラス面を評価」して対立候補の擁立を見送り、県政史上初の無投票となった。

尾崎県政は県民世論調査で8割を超える満足度を維持。3期目も対抗馬は現れず、尾崎は戦後の都道府県知事で2人しかいない2期連続無投票当選を果たした。

そして今年8月、尾崎は4選不出馬とともに、次期衆院選高知2区に自民党公認で出馬したいとの意向を表明。後継候補として浜田が立った。これに反発した野党勢が統一候補として松本を擁立。与野党一騎打ちの激戦が繰り広げられている。元号が「令和」に代わって初の知事選。県内60万有権者が新たな県政リーダーに選ぶのは一。(池一宏)

高知新聞 2019.11.16 08:25

2019高知県知事選 私はこちら(8)福祉・医療

県内の高齢化率は2040年に40.9%に達する見通しです。高齢者や障害者らの福祉・介護・医療の拡充、県民全体の健康づくりをどう進めますか。



松本顕治 無所属・新(立憲民主党高知県連、国民民主党高知県連、共産党、社民党推薦)

医療・介護・福祉分野は、県民の暮らしを支えるとともに、大きな雇用の場となっています。その処遇は、国の公定価格に左右されることから、改善を国に強く求めています。ノーリフト介護、条件不利地の事業者支援に取り組みます。

国は、この10月、公的病院の再編統合に再度号令をかけました。高知県の実情を無視したものであり、市町村とも連携し、反対を貫きます。

国民健康保険料の見直しと介護保険の保険料・利用料の軽減措置を国に求めるとともに、県の制度としても検討します。

医師確保は全県的課題です。県として医師確保を一元的に支援できる医師確保センターの設置などに取り組みます。

浜田省司 無所属・新(自民党、公明党推薦)

日本一健康長寿県構想のさらなるバージョンアップを図り、県民の健康寿命の延伸を目指します。

具体的には、(1)医師確保や中山間地域の医療確保を強化し、地域の実情に合わせた医療提供体制を構築(2)医療や福祉の各サービス資源をネットワークとしてつなぐ「高知版地域包括ケアシステム」を各地域で構築(3)在宅での療養環境の充実や糖尿病などの重症化予防対策の推進により、持続可能な社会保障モデルの構築(4)地域の支え合いの拠点「あったかふれあいセンター」の取り組みのさらなる推進一などです。

これらの取り組みにより住み慣れた地域で、健やかで心豊かに安心して暮らし続けることのできる高知県の実現を目指します。

16日の候補者

【松本候補】土佐市、高知市

【浜田候補】高知市

しんぶん赤旗 2019年11月16日(土)

高知県知事選 同行ルポ “ここで一緒に生きよう” 野党統一・松本候補 県西南端走る 幅広い応援弁士が伴走

24日投票の高知県知事選で、野党統一の松本けんじ候補(35)は13、14の両日、県西南端を駆けました。主に海沿いの小さな集落を相次いで訪れ、「ここでいっしょに生きよう。だれ一人取り残さない県政へ」と語りかける松本候補に同行しました。(伊藤幸)

「市民と野党の共同候補」の看板を掲げる候補者カー。幅広い応援弁士が乗り込み、伴走し、応援演説しています。

先々で駆けつけ

13日は三原村、宿毛(すくも)市を遊説し、松本候補と“一心同体”で駆ける選対本部長の広田一衆院議員が同乗。「国の言

いなりでなく、高知のことは高知で決める。みなさんの思いを松本けんじに託してください」と訴える広田氏の声が山に、街に響きます。演説場所に到着すると、2人で住民のもとに駆け寄りま



(写真) 住民に政策を訴える

松本候補＝14日、高知県大月町

宿毛市役所のそばでは、国民民主党県連顧問の平野貞夫元参院議員が「私は保守本流だが、革新の本流は幡多(はた)郡から始まった。野党統一の松本さんで、だれ一人取り残さない県政をつくり国政へと広げて」と力説。夜の演説会でも弁士を務めたほか、社民党の松浦英夫、日本共産党の今城隆両市議も訴えました。



翌14日午前7時半、同市のホテル前には松本候補を見送るため、十数人が集まりました。その一人、広田一後援会宿毛支部の山本博司会長(82)は、「反権力の姿勢で、信念を持ち、住民に密着した明確な政策を持つ候補者。若い新進の知事になってほしい」と期待を寄せました。

この日は終日、地元選出の県議会会派「県民の会」の橋本敏男県議が同乗。大月町、土佐清水市を走り、土佐清水市では社民党の弘田条、共産党の前田晃両市議も同行しました。

四国最南端の足摺(あしずり)岬まで駆け、沿道や車の中から多くの激励が寄せられました。水産会社の前では仕事帰りの女性の一団から声援。ふとんをとりこみながらベランダから手を振る女性、差し入れを手渡す農作業中の麦わら帽子の女性、漁網の手入れ中に手を振る男性たち、沿道からの各地で「がんばれよー!」と両手をあげて激励する人の姿が見られました。

100メートル進むたびに



(写真) 住民に駆け寄り握

手する松本候補＝14日、高知県大月町

100メートル進むたびに声援がかかる地域もあり、松本候補はそのたびに車を降りて全力で住民に駆け寄りました。橋本県議も一緒に走り、「頼みます!」とあいさつ。車が前に進めないほどの激励に、松本候補は「力が出るなあ」と話しました。

同市のJA前では県民の会の石井孝県議も応援演説。夜の演説会には立憲民主党幹事長代理の大串博志衆院議員が駆け付け、「子どもを思い、私たちの農業、漁業を思う。そういう人を安倍政権にもの言える候補として押し上げよう」と呼びかけ、満席の会場からは熱い拍手が何度も起こりました。

住民の思い切々

西南端の漁村や農村などを駆け、「住みたい場所で生き続けられる高知にしたい」「1次産業で安心して生きていける環境をつくりたい」と熱く語る松本候補。地域の住民からは切実な思いと期待が寄せられました。

14日、大月町の龍ヶ迫(たつがさこ)では、半農半漁の30世帯ほどの集落で暮らす住民たちが、強い風に波音が響くなか松本候補の到着を待っていました。男性(80)は「近所に一人で外出できないおばあちゃんがいる。取り残されているんです。県政を庶民のためのものにしてほしい」。松本候補の手を固く握りました。



(写真) 車から降りて住民のもとに向かう松本候補と「県民の会」の橋本県議＝14日、高知県土佐清水市

橋浦(たちばなうら)漁港の前では、漁業をしていたという女性(64)が「今は養殖も大手企業だけで、地区で働ける場所がない(ないから)、息子も帰ってこん。けんじ君は県民に寄り添って行動したいと言っている。ここで働けるようにしてほしい」。柏島では住民が「ここまで来てくれたことがうれしい」「信頼できる候補」と期待を寄せました。

土佐清水市の商店前で演説を聞いた女性(43)は「消費税も増税され、格差も広がっている。今の自民党のやり方はおかしい。松本さんはトップダウンじゃなく、小さな声も聞いてくれそう。野党共闘も面白い」と話しました。

「県民のみなさんの知恵や力こそが、高知県をより良くしていく一番の原動力です」と呼びかける松本候補。残る期間、高知の隅々まで駆け抜けます。